

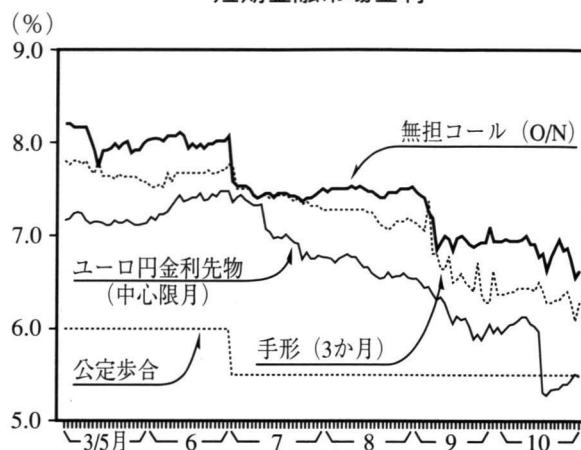
金融市場動向（平成3年10月）

1. 短期金融市場

10月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、上旬に安定的に推移した後、中旬以降低下傾向をたどった。また、ターム物（手形3か月物）も、中旬より概ね低下傾向をたどった。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）は低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は36兆3,037億円と前月（34兆8,021億円）を上回った。

短期金融市場金利



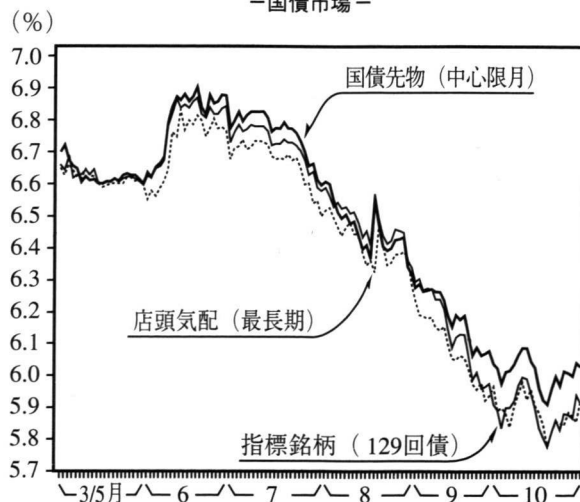
2. 資本市場

10月の国債利回り（129回債）は、上旬は高値警戒感や証券大手4社に対する行政処分から幾分上昇した後、中旬にかけては国内短期金利の低下を受けて低下したものの、下旬には若干上昇した（10月末5.92%＜前月末5.98%＞、国債先物中心限月6.03%＜同6.09%＞）。

国債の出来高（1営業日平均）をみると、現物（店頭取引）、先物とも前月を下回った。

株式市況（日経平均株価）は、上旬に準備預金制度の準備率引下げの発表（10月1日）や為替円高の進行を好感し続伸した後、証券大手4社に対する行政処分を受け幾分軟化したものの、その後は国内長短金利の低下等から上昇傾向をたどり、25,222円（前月末比+1,306円）で越月。株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は3.9億株と、前月（4.8億株）を下回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



起債動向をみると、長期国債（10年＜価格競争入札分＞）については、金融緩和期待等を背景に前向きな応札となった（10月1日入札分、募入平均利回り5.929%、応募倍率4.73倍、10月29日入札分、募入平均利回り5.832%、応募倍率3.53倍）。また、10月の短期国債についても、証券大手4社の入札が自粛されたものの、他の証券、銀行により前向きな応札をみた

（10月4日入札分＜6か月物＞、募入平均利回り6.176%、応募倍率2.52倍）。

エクイティ市場での発行（10月払込み分、国内市場発行分）については、前月に続き低位にとどまった。

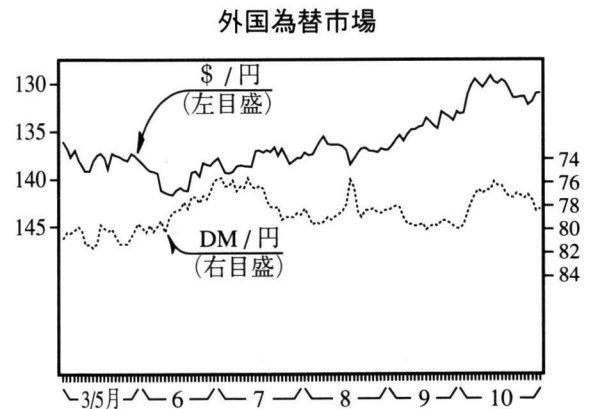
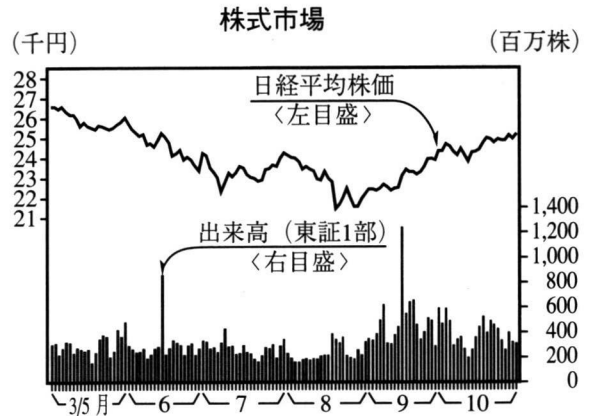
国内公募事業債の発行は、月央以降証券大手4社の法人部門が営業を自粛したこともあって、発行体の模様眺め姿勢が強まり前月を大きく下回った（9月1,387億円→10月100億円）。

なお、9月に発行された国内無担保普通社債の期中受託手数料が引下げられた。

3. 外国為替市場

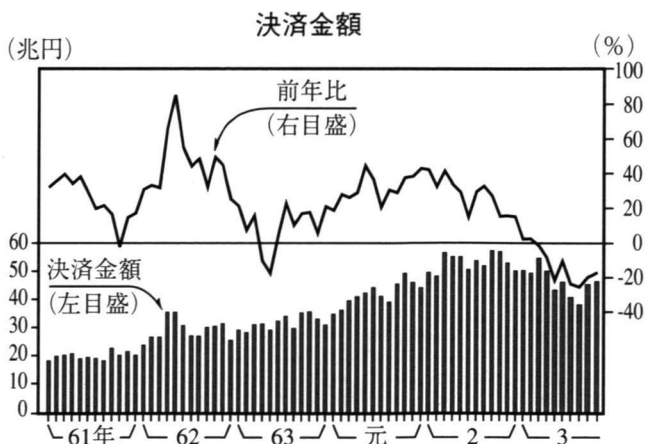
10月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、上旬にG7をめぐり思惑から上昇したが、その後は日本の公定歩合の引下げ観測等から反落し、結局131.00円で越月した（前月末132.95円）。また、マルクの対円相場（ニューヨーク市場、終値）は、月央まで低下した後に反発し、77.14円で越月した（前月末79.87円）。

この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は211.4億ドルと、前月（175.2億ドル）を上回った。



4. 決済

10月の資金決済の金額（1営業日平均）は、前年比減少した（手形交換高＜東京＞前年比△21.2%、全銀システム取扱高同△13.0%、外為円決済交換高同△15.8%、日本銀行当座預金受払額同△7.9%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振込口座振替）は、前年に比べて、移転登録（前年比△30.5%）は減少した一方、振込口座振替（同+10.2%）は増加した。



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

10月の資金需給は、銀行券要因が2,496億円程度の余剰（前年同6,091億円）となったものの、財政要因が租税の受入れや国債発行により13,581億円の不足（前年余剰11,125億円）となったことから、全体では、7,277億円の不足（前年余剰19,913億円）となった。

これに対し日本銀行は、手形買入れ等により資金を供給した。

11月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因が3,000億円程度の不足（前年同3,494億円）となる見通しであるものの、財政要因については、地方交付税交付金の支払い等がかさむことから、5兆4,800億円程度の余剰（前年同5兆8,759億円）となる見通し。この結果、全体では5兆6,300億円程度の資金余剰と予想される（前年同5兆8,135億円）。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

9月のM₂+CD平残前年比伸び率は+2.2%と、前月比0.5%ポイント低下した。これは、主として貸出の伸び率が引続き低下したことによるもの。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が小口MMC、大口定期預金を中心に引続き低下したほか、預金通貨も幾分伸び率を低めた。

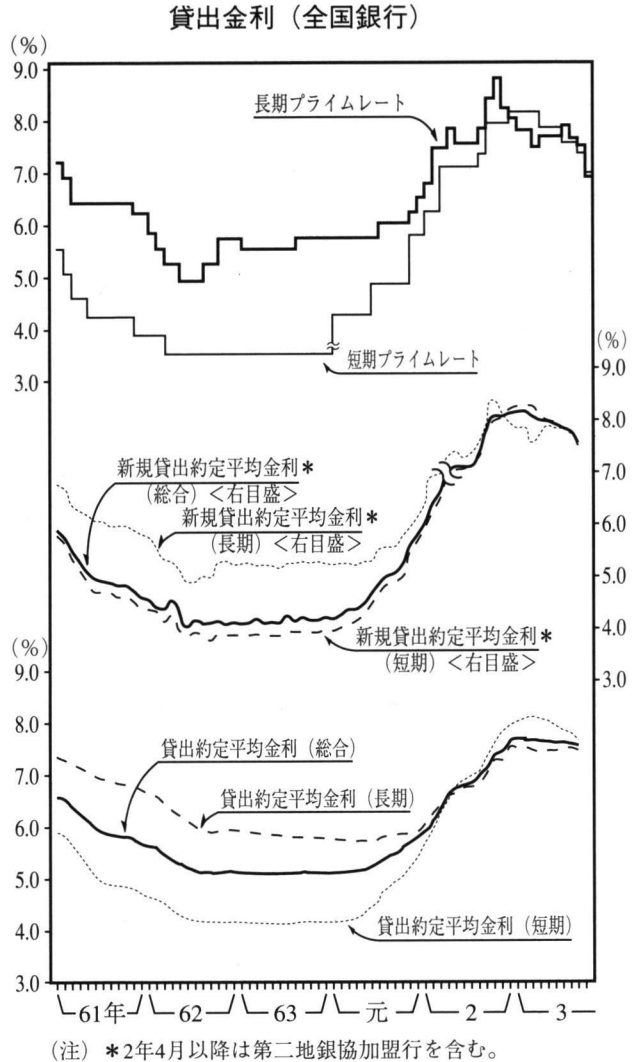
10月の銀行券平残前年比は、+1.5%と引続き低い伸び（前月+1.2%）。

10月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、第二地銀協加盟行）は、前年比+1.1%と前月（同+1.4%）をさらに下回り、既往最低の伸びとなった。一方、貸出平残（都・長銀、信託、地銀、第二地銀協加盟行）は、前年比+5.1%と前月（同+4.9%）をやや上回った。

7. 貸出・預金金利

9月中の新規貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、短期金利が短期プライムレート引下げ(9月11日以降、7.625%→7.375%)の影響から、また、長期金利は長期プライムレートの引下げ(9月2日以降、7.7%→7.5%)から、それぞれ前月比低下し(短期△0.212%、長期△0.239%)、長・短総合でも前月比低下した(8月7.774%→9月7.556%)。この結果、貸出約定平均金利(全国銀行)も、短期(△0.0143%)、長期(△0.035%)、総合(8月7.592%→9月7.526%)のいずれも前月比低下した。

この間、9月の大口定期預金金利(3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利)は、前月比低下した(8月7.029%→9月6.516%)。



(平成3年11月13日、調査統計局)